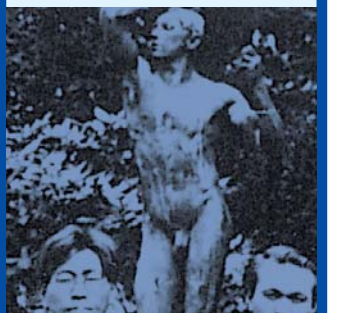


上野の杜の 波瀾万丈

第五回
紅一点

藝大美術学部の前身、東京美術学校を卒業した最初の女性はアメリカ国籍だった。「美校騒動」を経て終戦に至る女性をめぐる近代史。

吉田千鶴子



マリイ・イーストレーキ

明治三十六（一九〇三）年のある日、蓬髪で衣服にも無頓着な生徒の多い西洋画科の教室がいつになくざわめいていた。女生徒が入学するというのだ。しかもアメリカ国籍だという。教師の長原孝太郎に懇々と言い含められた生徒たちは、彼女の使うイーゼルに菜の花や蒲公英を飾って、紳士的に入来を待ち構えた。女性の名はマリイ・イーストレーキ。祖父は日本に近代歯科医学を初めてもたらしたウイリアム・クラーク・イーストレーキ、父は英語辞典の刊行や英語教育で名高いフランク・ウォーリントン・イーストレーキで、母は日本人だ。普通に日本語を話す容貌はアメリカ人風であった。

彼女の東京美術学校（美校）入学を決めたのは西洋画科主任の黒田清輝だと言われている。紅一点のマリイは熱心に勉強し、いい成績を収めたので、同級生にはむしろいい刺激を与えたようだ。講道館で柔道も習っていたというから、黒田も心配しなかったのだろう。卒業制作自画像（大学美術館蔵）を見ると、確りした性格の澁刺とした女性であったことが推察される。卒業後、さらに研究科に進み、黒田の率いる白馬会に出品するなど意欲的な姿勢を見せたが、大正二（一九一三）年に日本人の銀行員と結婚し、消息を絶つてしまった。もしも彼女が美術界で活躍していたとしたら、女性に対するいわれのない偏見を打ち消し、後述のような美校の女生徒受け入れ運動にも力を与えたらうと

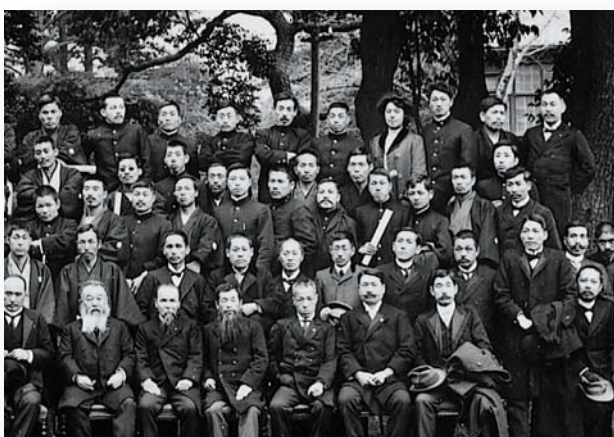
思うと、惜しいことである。

戦前の美校に入学した女性というと、すぐにこのマリイ・イーストレーキの名が思い浮かぶが、彼女のようにきちんと卒業しないまでも、在学した女性はいくにもいる。メリイ・ロイド（明治三十三年、西洋画科、イギリス）、ジョセフィン・ハイド（同三十四年、同科、アメリカ）、ハイエット・デリンジャー（同四十二年、日本画科、同）ら短期の在学者だ。また、一期通学を許された者にラギー・ゾルフ（昭和三年、西洋画科、ドイツ）、張吟秋（同年、同科、中国）、ヘレン・エンドマン・ドルフ（同六年、彫刻科、ドイツ）らがいる。このなかでジョセフィン・ハイドは美校の元助教狩野友信の弟子で、元校長岡倉天心が率いる日本絵画協会展に出品していることからみて天心が美校との仲介をしたことが考えられる。張吟秋は女子美術学校の卒業生で、中華民国特命全権公使・汪榮宝の要請で通学が特別に許された。ラギー・ゾルフはドイツ大使の娘だから、政府筋の後押しがあったのだろう。ほかは出自や入学・一時通学許可の事情を推測する手がかりがない。

彼女たちは、モデル以外に女性の姿を見ることのない美校では当然目立つ存在であり、関心的であったためか、いろいろのエピソードが伝わっている。卒業生たちの回想記を読むと、マリイ・イーストレーキが遊動円木に興じている姿を懐かしむ人があれば、図画師範科の白浜徹の部屋で鶴田機水に日本画を習っていたハイエット・デリンジャーの姿を皆で覗きに行った



マリイ・イーストレーキ筆 卒業制作自画像
明治40年 大学美術館蔵



紅一点のマリイ・イーストレーキ 明治40年卒業記念写真

り英語の会話を試みたりしたときのわくわくした体験を語る人もいて、鮮明な記憶が脳裏に刻まれていたことがわかる。

この七人の女生徒はみな外国人で、六人までが西洋

人だ。美校が日本人女性を排斥しておきながら、外国人女性を特例として受け入れたのは、別にそうした規則があったためではなく、外交上の観点による臨時の措置であった。要するにその時々政府および美校当局者の判断に任されていたと言える。日本人女性はその特例の対象にすらならず、美術を志す女性は教育体制や環境において大きな隔たりのある私立の女子美術学校（明治三十四年創設当初は刺繍・造花・裁縫・日本画・西洋画の部門があった）や私設の研究所その他で学ぶ以外に途はなかった。

男子校であることを明文化

さて、本学の学生は、四、五年前から男性より女性が多くなり、今は美術学部も女生徒のほうが多いという（学生課榎田氏談）。自然な成り行きであって、結構なことだ。ただし、音楽学部は前身の東京音楽学校がもともと男女共学であったから、女生徒が多いのは当然だが、美術学部は前身の美校が上述のように男子校で、戦後の昭和二十一年（一九四六）年にGHQの指令による教育民主化政策のもとで男女共学になってか



昭和6年4月彫刻科塑造部入学生とヘレン・エンドマンズ・ドルフ。後列中央は北村西望

ら女生徒が徐々に増えたのであって、その経緯が異なる。では美校はなぜ約六〇年もの間女生徒を受け入れなかったのか。結論から言えば、原因は美校ではなく文部省・政府側にあったのである。

美校創立当初の規程には男子校であるとは記されていない。しかし、明文化されていない規定でもあったのか、あるいは女性の受験生が皆無だったのか、合格者は男子のみであった。開校後まもない明治二十三年の新聞が、美校教官の間に絵画などは男子よりも女子に学ばせるほうが適当だという議論が起こって女子部設置の検討をしていると報じているところをみると、情勢は流動的だったようだ。この問題は進展をみないまま明治三十一年の美校騒動（本誌第十一号参照）による動揺期を経て同三十四年から敏腕校長正木直彦の時代となる。正木がその手始めの大仕事として文部省の専門学校令制定（明治三十六年）準備に伴う美校制度改革の検討を進めるなかで、潜伏していた女生徒受け入れ問題が浮上し、検討の結果、正木は文部大臣に受け入れ実施の建議をした。しかし、文部当局に反対者が多く実施は困難とみる言論界の観測どおり、建議は否定され、明治三十八年の美校規則大改正の際、逆に男子校であることが明文化されたのである。美校側はこの問題を重要と見て保留しておくことにした。

女生徒受け入れに動いた正木直彦

ところで、大正五年の春には再び美校騒動が起こっている。正木の輝かしい経歴に傷をつけたと言われる美校改革運動の勃発だ。美校当局の長髪・和服・編物外套禁止をはじめとする風紀粛清に生徒が猛反発したことが発端となり、元西洋美術史教授岩村透の煽動により生徒・教官・卒業生その他を巻き込んだ改革運動に発展。国民美術協会が文部大臣に美校改革案を提出するに至った。ジャーナリズムを沸き立たせ、美校の

「諸悪」が暴露されたり種々の改革論が闘わされたりした事件だった。しかし、美校を根本的に改革しようという趣旨の国民美術協会改革案も、また、外の改革論も女生徒受け入れ問題を一顧だにしていなかったのである。結局、改革派の人々には男女共学が美術教育制度の根幹にかかわる重要な問題として認識されていなかったのだ。

それに比べれば美校当局・正木校長の姿勢は冷静沈着だった。改革運動が急速に鎮火して暫くたった大正十年二月、美校は校長・各科教官合意のもとに女生徒受け入れを決定した。この決定には折からの大正デモクラシー気運のもとでの教育界・言論界における女子高等教育促進運動（特に美校を女子にも開放せよという要求が強く打ち出された）が影響を及ぼしていたと考えられるが、美校側はむしろこの機に乗じて積極的に懸案を解決しようとし、受け入れのための規則改正を文部大臣に上申した。上申に際して正木校長が「現代は既に共学の弊害を云為する時でなく方法も頗る簡単で唯規定を改正しさへすればよい。曩に女子の入学を許した東北医大でも成績がよいから是非とも我校でも実行したい」と述べたと『東京日日新聞』が報じている。しかし、予算不足を理由にまたしても却下。次年度は実施の具体案を提示したが、これも却下。その後昭和八年まで根気よく要請し続けたが、全て徒勞に終わり、戦時色が強まっていったなかでは要請すらできない状態となって、遂に男子校のまま終戦に至ったのである。

（よしだ・ちづこ／美術学部教育資料編纂室）

次号予告

プリングスハイムの時代 昭和六年～十二年
東京音楽学校の管弦楽を六年間にわたり率いたプリングスハイムは、グスタフ・マーラーの弟子で、ベルリン・フィルハーモニーの客演指揮者としてマーラーの全交響曲と歌曲を指揮した実績を持つ。プリングスハイムの着任とともに近現代の難曲が演奏会に並び、賛否両論の批評が新聞雑誌を賑わせた。